



日本植物病理学会ニュース 第57号

(2012年2月)

【今後の学会活動予定】

1. 平成24年度大会開催予定

日時：平成24年3月28日（水）～30日（金）

場所：福岡国際会議場

〒812-0032 福岡市博多区石城町2-1

TEL：092-262-4111

大会HPサイト：<http://www.knt.co.jp/ec/2012/ppsj/index.html>

連絡先：平成24年度日本植物病理学会大会事務局

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学大学院農学研究院 植物病理学分野内

TEL：092-642-2834（土屋 健一）

092-642-2835（古屋 成人）

FAX：092-642-2834

Eメール：byouri24@agr.kyushu-u.ac.jp

2. 第2回日韓合同シンポジウム開催予定

日時：平成24年3月27日（火）

場所：福岡国際会議場

〒812-0032 福岡市博多区石城町2-1

TEL：092-262-4111

開催要領：[http://www.ppsj.org/pdf/meeting/2012\(H24\)](http://www.ppsj.org/pdf/meeting/2012(H24)korea-japan_rev3.pdf)

[korea-japan_rev3.pdf](http://www.ppsj.org/pdf/meeting/2012(H24)korea-japan_rev3.pdf)

連絡先：静岡大学 農学部 露無 慎二

abstuyu@ipc.shizuoka.ac.jp

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

TEL：054-238-4823

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

(1) 北海道部会

平成23年度北海道部会は札幌市の北海道農業研究センターで10月13日・14日の2日間にわたり開催された。参加者は93名であった。13日は「センチュウ研究の最近の成果と展開方向」をテーマとして第212回談話会が開催

された。北海道農業における重要な問題の一つである植物寄生性センチュウについて基礎から防除までを網羅する内容で、北海道大学 後藤デレック氏による「侵入過程におけるネコブセンチュウと植物シグナリングネットワークの相互作用」、北海道立総合研究機構上川農業試験場 東岱孝司氏による「ダイズシストセンチュウの被害と防除対策」、北海道立総合研究機構北見農業試験場 古川勝弘氏による「北海道におけるジャガイモシストセンチュウの発生状況と生産者による検診の取り組み」、北海道農業研究センター 奈良部 孝氏による「孵化促進物質を利用したジャガイモシストセンチュウの防除技術の開発」の4課題の講演をいただき討論を行なった。14日は研究発表会および総会が開催された。発表講演ではウイルス病・糸状菌病等合計17題について活発な質疑応答が行なわれ、総会では庶務報告・会計報告等が行なわれ提案通り承認された。

(秋野聖之)

(2) 東北部会

平成23年度（第47回）日本植物病理学会東北部会は10月31日と11月1日の2日間にわたって青森市の青森市民ホールで開催された。参加者は71名（懇親会69名）で、研究発表は口頭発表が15題、ポスター発表が9題であった。内容は、糸状菌病が9題、ウイルス病が12題、細菌病が2題、生物防除が1題で、活発な討論が行なわれた。

今年度の東北部会は例年より1ヶ月ほど遅い時期の開催となった。これはこの年東北地方で開かれることとなった第5回植物病害診断研究会と同時開催としたためであった。部会の研究発表会が1日目の午後の後半と2日目の午後に実施され、診断研究会が1日目の午後の前半と2日目の午前実施された。せっかくの機会であるので、多くの方々両方に参加しやすいようにとの配慮から、双方の研究発表や講演、それに総会などが入れ子状態となって進行した。平成22年12月に、それまで八戸市までであった東北新幹線が青森市まで延伸したこともあり、診断研究会には全国から多くの方々参加されるとともに、東北部会参

加者のほとんどが参加した。例年とは異なるスケジュールとなった部会に会員各位のご理解を頂いて、いつもより賑やかな東北部会となった。

平成 19 年度から行なってきた日本植物病理学会東北部会地域貢献賞については被推薦者がなく、今年度の授与は見送られた。幹事会並びに総会において次期部会長として秋田県立大学の古屋廣光が再選・承認された。また平成 24 年度部会は山形県担当（開催地幹事は山形大学長谷修氏）で開催されることとなった。

以上のように本年度も滞りなく東北部会を開催することができたが、もうひとつ例年と異なる点があった。それは 3 月 11 日の大震災およびその後の津波や原子力発電所事故の影響が参加者の心に何かしら暗い影を落としていたことである。未曾有の震災に東北地方の農業、農業試験・研究機関および大学も大きな被害を受け、その後遺症は部会開催当時も今もまだ完全に癒えたわけではない。改めて被災された方々にお見舞いを申し上げるとともに、復興に尽力されている皆様に心から敬意を表する次第である。

(古屋廣光)

(3) 九州部会

平成 23 年度日本植物病理学会九州部会は九州病害虫研究会との共催で、11 月 9 日（水）、10 日（木）の 2 日間にわたり、大分県労働福祉会館（大分市）で開催された。参加者は約 90 名であった。講演数は 25 題で、内訳はウイルス病関係 8 題、菌類病関係 6 題、細菌病関係 11 題で活発な発表・質疑応答が行われた。幹事会ならびに総会は初日に開催され、古屋成人庶務幹事の進行で、役員の交代、庶務・会計報告、次年度の開催計画等が審議・承認された。平成 24 年度の部会は福岡県で開催されることとなった。また、土屋健一部会長（九州大）より、福岡市において開催される平成 24 年度大会（土屋健一大会委員長）への協力依頼、大会運営組織の正式発表、および大会準備に向けたスケジュールに関する説明が行われた。また、大会前日に開催される日韓合同シンポジウムについても説明が行われた。さらに、岩井久（鹿児島大）学会誌次期副編集委員長より来年 1 月から次期編集委員会を九州地区で担当するため、大島一里（佐賀大）次期編集委員長を中心とした関係者への協力依頼がなされた。また、土屋健一部会長より来年度の植物病害診断研究会を九州地区で開催すること、および次回の九州部会シンポジウムを休止することについて提案があり、それぞれ了承された。2 日目には第 36 回九州部会シンポジウムが開催され、三和酒類株式会社拜田グリーンバイオ事業所の後藤高弘氏による「イネ白葉枯病抵抗性遺伝子のマッピング」、九州大学熱帯農学研究セン

ターの Seint San Aye 氏（JSPS 外国人特別研究員）による「Geographical distribution and genetic diversity of *Rhizoctonia* spp. associated with rice sheath diseases in Myanmar（ミャンマーにおけるイネ葉鞘病害に関連した *Rhizoctonia* spp. の地理的分布と遺伝的多様性）」、ならびに（独）農研機構九州沖縄農業研究センターの井上博喜氏による「イネ種子の鉄コーティング処理による育苗期の発病抑制」の 3 つの話題提供があり、活発な討論が行われた。（土屋健一）

2. 研究会・談話会開催報告

(1) EBC 研究会ワークショップ

研究会発足から 7 回目を数える EBC 研究会ワークショップ 2011 が、10 月 18 日 12 時 30 分から 17 時 15 分まで、東京都世田谷区の東京農業大学校友会館グリーンアカデミーで開催された。今回のワークショップは、3 月 11 日の大震災により一旦中止とされたものを、薬剤耐性菌研究会との共同開催としてようやく開会にこぎ着けることができたものであった。

第一部は長崎県農林技術開発センターの菅 康弘氏による「現地圃場試験の積み重ねによるビワ病害防除でのエビデンス構築」、岩手県農業研究センターの岩館康哉氏による「薬剤防除試験成績の現場指導への活用事例—岩手県における農作物病害虫・雑草防除指針を例に一」および青森県産業技術センター農林総合研究所の倉内賢一氏による「水稻品種『まっしぐら』の穂いもちに対する減農薬防除体系別リスク評価」の 3 題の講演と熱心な討論が行われた。

休息後の第二部では、まず岡山県農林水産総合センター農業研究所の川口 章氏を座長とし第一部の講演者 3 名を演壇上に招いた形で、「EBC 研究会が目指す、病害防除と—ワークショップ 7 年目を迎えて—」と題したパネルディスカッションが行われた。第一部の興奮冷めやらぬ中で、座長を筆頭にコメンテーター諸氏の奮闘により、本研究会の今後の目指すべき方向について熱い討論が行われた。引き続き「新規薬剤の紹介」では、JA 全農営農販売企画部営農・技術センターの川幡 寛氏による「展着剤の種類と機能」、石原産業（株）生物科学研究所の杉本光二氏による「展着剤『まくびか』の『作用特性と上手な使い方』および日本化薬（株）研究開発本部アグロ研究所の小川一輝氏による「展着剤『ワイドコート』の作用性と上手な使い方」として、いずれも展着剤に関する講演が行われた。

本年は大震災の直後であるとともに開催時期が例年と異なることから、参加者の大幅な減少が心配されたが、共同開催を快く引き受けていただいた薬剤耐性菌研究会のご協力もあって 102 名の参加者を得、さらにはワークショップ

終了後の懇親会も非常に盛況であった。運営委員一同、皆様からの大きな支援と期待に対して感謝の念を表すとともに、次年度以降の本研究会の活動に向けて大きな力を得られたと強く感じているところである。(根岸寛光)

(2) 殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

第21回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、平成23年10月19日に東京農業大学グリーンアカデミーホールで開催された。当初、H23年度大会とともに東京都府中市で3月31日の開催は、東日本大震災に伴い中止となっていたが、日を改めてEBC研究会ワークショップ2011(10月18日開催)と合同開催する運びとなった。例年がないスケジュール、3月当初予定から1つ少ない5講演での開催であったが、平年と変わらぬ106名の参加者(講演要旨集のみを含む)を得て、終日活発な議論が交わされた。

最初にバイエルクロップサイエンスのValerie Toquin氏が、新規の病害抵抗性誘導剤であるイソチアニルに関する話題提供を行った。イソチアニルの作用をイネの遺伝子発現の面から解析し、サリチル酸をシグナルとする経路を通じ、PRタンパク質やフラボノイド合成経路など抵抗性に関与する種々の遺伝子発現を迅速に促進することが紹介された。こうした多種多様な作用メカニズムが、耐性菌発生のリスク回避につながると考えられる。

次いで、岐阜県農業技術センターの渡辺秀樹氏が、岐阜県におけるアズキシストロビン耐性トマト葉かび病菌の発生動向について話題提供を行った。これまで国内で確認された種々の病原菌のQoI剤耐性では、チトクロームb遺伝子143番目のコドンのG143A変異が確認されていたが、葉かび病菌では国内初となる129番目のコドンのF129L変異が検出された。また、葉かび病抵抗性品種の導入が耐性菌対策の面でも有効であることが示唆される一方、これを侵すレースの出現が抵抗性品種の寿命を短くするリスクもあり、物理的な消毒や伝染環の遮断等、多様な防除手法の組み合わせが必要とのことであった。

午後の部ではブドウ病害のQoI剤感受性が取り上げられた。まず、山梨大学の鈴木俊二氏から、遺伝子診断を活用したブドウべと病菌におけるQoI剤感受性の全国調査の事例が紹介された。2008～2009年に実施された北海道と本州7県の調査では、北海道と青森県を除く各地でQoI剤耐性菌の存在を確認し、既にわが国に広く分布することを紹介いただいた。海峡によって本州から隔離されている北海道の今後の動向に注意が必要である。

山梨県果樹試験場の綿打享子氏からは、2009年以降、顕在化したQoI剤耐性べと病菌の出現に伴う山梨県の現場の状況を報告いただいた。2009～2010年に行われた県

内各地の調査では、ほとんど園地で耐性菌が確認された。べと病に効果の高い薬剤はQoI剤以外に数種あるものの、モモ、オウトウなど隣接果樹園へのドリフト懸念から使用できる薬剤に制限があるのが実情とのことであった。

最後に長野県果樹試験場の近藤賢一氏が、ブドウ晩腐病菌のQoI剤感受性の実態を報告した。2008～2009年に長野県内各地から採集した晩腐病菌中に、感受性の低下した菌株を確認したものの、晩腐病の被害自体は2006年をピークに減少し、QoI剤の薬効低下が疑われる状況にないことなどから、現時点で大きな問題となる段階にはないとのことであった。しかしながら、長野県でもQoI剤耐性べと病菌の発生を確認しており、晩腐病と併せ基本的にはQoI剤に依存しない防除体系に切り替える必要があるとのことであった。

最後に、本シンポジウム開催にあたってご支援いただいた関係各位、とりわけ合同開催に向けて多大なご協力をいただいた東京農業大学 根岸寛光先生はじめ、EBC研究会運営委員の皆様から心から感謝申し上げます。なお、H24年度も福岡での植物病理学会大会開催にあわせ、本研究会シンポジウムの開催を予定しています。(足立嘉彦)

(3) 第5回植物病害診断研究会

第5回植物病害診断研究会は、平成23年10月31日、11月1日の2日間にわたり、青森市の青森市民ホールで開催された。参加者は試験研究機関、大学、普及機関、農業団体、企業など、北は北海道から南は九州鹿児島まで、人数は約190名であった。第1セッションでは、「減農薬栽培の功罪?」というテーマで、本蔵良三氏(宮城大学食産業学部)から「近年問題となっている水稲病害の見分け方」と題して、以前はマイナー病害であった墨黒穂病やばか苗病といった新潟県や東北地方の稲作地帯で問題となっている病害を紹介いただいた。引き続き、水野晶巳氏(株式会社ニッソーフィールドサービス)から「農業業界の視点から、今後発生増加が危惧される病害」と題して、病害虫予察情報に基づき、今後多発生が予想される病害の紹介をいただいた。第2セッションでは、「診断の困難な病害に出会ったとき、その解決方法の事例」として、小林慶範氏から(横浜植物防疫所調査研究部)「植物検疫における病害の診断について」と題して、植物防疫所の病害診断体制や本邦に進入が危惧されている病害の具体的な診断事例を紹介いただいた。また、菅原敬氏(山形県庄内総合支庁農業技術普及課)からは「農家に納得してもらえる診断とは～花きの現場対応から広義の診断を考える～」と題して、生産者の望む診断とその後の対策について紹介していただいた。4講演とも演者自身の研究や経験に基づいてお

り、アンケートにおいても、非常に興味深かったと好評であった。2日目は、第3セッションとして、「細菌濾過器を通過する病原体の見分け方」というテーマで、佐野輝男氏（弘前大学農学生命科学部）からは「ウイロイド病を見分ける」、難波成任氏からは「ファイトプラズマ病を見分ける」と題した講演いただいた。両氏ともそれぞれの病原の特徴と診断のポイントを非常にわかりやすく説明していただき、2種の病原を理解する良い機会となり、今後の診断に役立つ情報を得ることができたと好評であった。また、山下一夫氏（青森県産業技術センター野菜研究所）からは、「現場でできるウイルス診断～RIPA法の普及と実用化～」と題し、これまでに同定されてきたウイルス病害の紹介とそれら病原ウイルスに対するRIPA法による簡易診断キットの開発から実用化までの経験談を講演いただいた。最後は、難波成任氏の司会により、これからの病害診断の方向性を中心とした総合討論が行われた。各県における病害診断体制や官学の連携事例なども紹介され、活発な意見交換がなされた。

今回は、東北部会と同一会場で時間を調整しながら開催したことから、多くの学生の参加があった。農業生産現場の最前線で病害に携わる方々の話を聞く機会ができたことは有意義であったと思われる。また、研究会が2日間にわたったことで合同懇親会への参加者も多く、活発な意見交換や情報交換が行われた。

最後に、講演者の皆様、遠方よりお越しいただいた参加者の皆様、東北部会との合同開催にご理解いただいた東北部会会員ならび研究会開催にご尽力いただいた開催地事務局の方々に感謝します。なお、第6回の研究会は九州で開催される予定である。（藤 晋一・中島敏彦）

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内 学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

加来久敏，畔上耕児，濱本 宏，植草秀敏，宮田伸一
各委員宛

編集後記

新年おめでとうございます。学会ニュース第57号をお届けします。新年にあたり会員の皆様方のご健康とご発展を、また、平成24年が学会にとってもよい年となりますよう祈念いたします。本年も学会ニュースを宜しくお願いいたします。

昨年は東日本大震災で、我が国は大きなダメージを受けました。「禍福は糾える縄の如し」と言われているものの、あまりに大きな被害でした。我が学会も大会の中止など、その影響はきわめて大きいものでした。今年は昨年の方もカバーし、さらに発展の年となるよう努力したいものです。

さて、学会ニュース第57号ですが、学会活動の予定と活動報告が中心となっています。昨年は大震災のあおりで東京で予定されていた大会も中止となりましたが、今年は2年分の充実度で、大会を盛り上げたいと思います。その大会は3月27日から3日間、九州・福岡市で開催されます。九州大学はじめ大会運営委員会の方々には大変お世話になります。それに先立ち、日韓合同シンポジウムが、さらにポスト大会として、いろいろな研究会が予定されます。とくに、日韓合同シンポジウムは学会の課題である国際化を目指した活動です。どうか奮ってご参加いただくようお願い申し上げます。

活動報告では北海道、東北及び九州の各部会、それに震災で遅れて開催されましたEBC研究会ワークショップと殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム、さらに植物病害診断研究会の報告が続きますが、いずれも盛会裏に終わり、同慶の至りです。開催事務局の方々、お疲れさまでした。

それでは、本年も情報交換の場として、この学会ニュースへのご投稿をお待ちしています。（加来久敏）
